せたかむい
発行・古平町史編纂室
古平町文化会館☎42-2590
第118号・平成11年7月1日

年表で読む古平の歴史

《26》

■請負人廃止による手続き

今まで場所請負人がやっていたことを官庁が経営するようになり、その手続きについて次のような通達を出しました。

一、支配人や番人、そのほか請負人に使われていた者たちは、みんなこれまで通りに雇うのでここにいて働くこと。

一、米・みそ・酒・塩・網そのほか木綿・鉄類・漁業に使う諸道具はこれまで通りとし、賃金は追々支払うようにする。

一、大阪や越後などへ注文した品物は蔵元へ納めれば、それに見合った利益は払うし、不足の品物が無いようにすること。

一、出稼ぎに来ている者にはよく話をし、家族を連れて土地に永住するのは勝手なので、その名前を書いて差し出すこと。

一、アイヌで生活に困っている者については、出産の子へ養育料として五年間にわたって毎年米を三俵ずつ与える。また妊娠の女を出稼ぎさせることは禁止する。

一、他の土地へ養子縁組のことは勝手である。

一、八〇歳以上の者は毎年届け出ること。

一、格別に孝養を尽くしている者がいたら届け出ること。

一、熊の胆（い＝胆のう）や熊の毛皮などに、特に高い値をつけたり密売などしないで官に納めること。

一、役目で宿に泊まった時は定められた金額でまかないをし、ほかに品を出した時は相当の代金を受け取ること。

一、元運上屋や番屋は本陣と呼び、運上屋と同じ場所に番屋があるときは脇本陣と呼ぶこと。

このような通知を出すと共に本陣、倉庫、米倉、道具、請負人の馬などはこれを官庁で買い上げることにしました。

■漁場が漁民に解放される

今までの漁場は漁場持ちに独占されていましたが、場所の廃止により、二八取り（漁場持ちに、二分の場所代を払って漁をしていた漁夫）や、そのほか新規に漁を希望する者に貸し付けることにしました。これによって、請負人による漁場の独占がはじめて破られることになったのです。

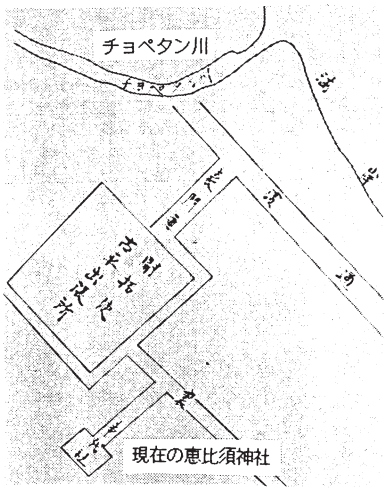
■漁業資金の貸し付け

開拓使は、北海道の漁業者が「資本が乏しいので、ほかから資金を借り受け、そのため多くの利息を払い、産物も価格が安いので、利益を上げる者が少ない」状況であることから、漁民には資金を貸し付けて漁業の奨励を図ることにしました。

明治三年一一月、道南地方では規則により、米・塩など日用品の類を函館での原価で漁業者に貸し付け、漁獲物の代金で毎年一一月に清算することにしました。

明治四年三月、後志の漁業者で、漁業資金の借用を願い出る者に対しては資金を貸し付け、漁獲物を売りさばいた後に、月一分の利息を添えて完納させることとしました。貸し付けは二回行われ、寿都など四郡へ千両宛、美国・積丹二郡へ七百両宛、古平・余市・岩内三郡へ千五百両宛、合計一万五千九百両がそれぞれ貸し付けられましたが、その大部分は期日までに返済されたといいます。

この年の五月、開拓使古平開拓出張所が新設されました。



大正五年

高野名幸作さんの日記から

漁村の世相を見る

【19】

10／9　今年ブドウが豊作、カレ網、綿糸類を買いに湯内や美国から客が来たが品切れになった。冨丸、砂川丸が競争して沢江沖を走っている。

10／1　小樽～青森間定期船の北辰丸が、丸山岬から港内に入って来た。綿糸類が入荷した。ガロの沢へ伊三君と笹渕のオドの三人で山ブドウを取りに行って来た。泥の木学校の前からひざまで水につかって川を渡ると、間もなくガロの開墾地に出た。戸数七、八戸もあり、まさ屋根の家も二軒ある。熊でも出てきそうな笹やぶをもぐりながらよい場所を探す。沢山あるとおもしろい。五時ころ帰り、量ったら三人で二斗五升あった。

10／12　快晴、このごろは毎日のように好天が続く。大謀網ではサバが大漁、いさばや連が大勢売りに来る。夕方、宝海寺前の水車が破損したという。水車を回してでんぷんを製造している機械を見に行ったが、なかなか大仕掛けのものだ。

10／15　消防組の演習があるというので、種田の家の前で練習している。大謀網ではブリが多く揚がる。

11／15　本州の仕入先や佐渡を回っての旅行から帰り、久し振りに店に出る。刺網の需要期に入ったので店は一日中忙しい。この分だと今年は予想外の売れ行きだろう。夜、十通余りの手紙を書く、万年筆は便利なものだ、これからは外国式のものがますます流行するだろう。

11／18　高山から網出荷したとの案内が入る。初めての取り引きだが、本日までに三百数十円もの品を送ってもらった。実に商人は信用が大事だ、大いに感謝している。ますます誠実にやらねばならぬ。

11／21　店は今日も忙しい、朝から客が切れぬ、カレ網六千間がすぐ売れた、薄利多売は確かに商売の秘訣だ、この後もますますこの方針で発奮せねばならぬ。刺網は大正三年五月初めから売り出したのだが、今や余市、島泊、湯内から美国、積丹にまで得意ができた。これも薄利多売の結果だ。

11／23　カレ網でテックイが三五貫（約一三〇キロ）獲れたというので、みんなが支度をして出漁準備だ。二時ころから火災予防組合で煙筒の検査に歩くことになった。十年前だとストーブはほんの二、三軒しかなかったが、今はどこでもつけている。

12／1　早や十二月、本年もみそかになった。本年の商品は随分波乱があった。農産では青えんどう、でんぷん、海産の数の子、鰊しめ粕、その他も暴騰が著しく、成金も随分いたという。山方面の農家の景気は大したものだとのこと。綿網も利益が大きいので手持ち品の利益もかなりあるだろう。商売としては近年に稀な豊年である。農園の測量をしたが、境界がよほど広くなったとのこと。

12／3　イカ漁は三百から四百宛て獲れたというので、にわかに道具が売れ出した。数年前からのものも出た。

12／6　入船町の大謀が大漁で、二十貫（七十五キロ）以上のマグロが十八本も揚がったという。

12／7　今日は、テックイを四十貫から五十貫も獲った船が何艘かあるという。道具類の売り上げが相当あった。

12／11　今年はカレ網漁が良かったので刺網がよく出る。刺網の季節になってきたので毎日多くの客で店も忙しい。商売もいつもこんなだとおもしろい。

――続く――

古いノートから ⑤

稲倉石の思い出つづり

富山市　高橋　藤蔵
（元・稲倉石鉱業所勤務）

云いたいなア

―（昭四十四・七記）―

稲倉石の皆さん、七年間本当にお世話になりました。

いま、富山のアパートで、ひとり静かに当時の事を思い出しいる。

私にとっては、何もかも、いろいろの意味で良い勉強をさせてもらった。

運動会・保育園・鉄砲水・大雪崩・慰安会・スポーツ・海水浴・アワビ採り等々。

とにかく何でもやり、何でも体験した。

その一つ一つが鮮やかに目に浮かぶ。

夜中に呑平が上がり込み

「キサマなんかダイナマイトで殺してやる」

と言っては、家族を震え上がらせた鉱夫さんも、実は、心底良い方だった。

懐かしい。もう一度皆さんと存分にダベリたい。そんな気持ちでいっぱいだ。

稲倉石を離れる時、何度も何度も私を振り返らせた鉱山のただずまいと、思い出の山々。

私の目を釘付けにした積丹の海と、奇観の数々。

もう、二度と見る事はあるまい……。

でも、四季、鮮やかに彩る大自然に抱かれた稲倉石と積丹の風景は、私の眼の底に、子供らの思い出の中に、何時までも残る事だろう。

さようなら。稲倉石。

ありがとう。稲倉石。

富山のお正月

―（昭四十五・一記）―

富山工場に転勤し、初めての正月を迎えた。

初雪が、うっすらとアパートのベランダを濡らし、窓越しに化学工場が見える。

その向こうに、初日に輝く立山連峰が、真っ白に突っ立っているのを眺めながら、ふと、丈余の雪の中で正月を迎えた稲倉石を思い出した。

山は吹雪いているのでは、相変わらず呑んでいるだろうか悪友は……。

「おとうさん何してんの。早くパンパンしようよ」

と、倅の声。

神棚に灯りをつけ、年にたった一度のかしわ手を打つ。

神に祈るとか、何かを誓うという気は毛頭ない。ましてや敬う、神々しいなどと思ってもいない。

機械的にパン・パン・サーと頭を下げるだけである。

こうしないと正月の気分がしないし、子供らにお年玉をやるきっかけにもなっている。

妙なものだ。私にも日本人の日本の心が微かに残っているようだ。

外は、細かい雪が音もなく舞っている。

七年間、私を温かくつつんでくれた稲倉石を偲びながら、今年こそ、何か良いことがありますようにと、もう一度初日を眺めた。

遥かなる故郷の思い出
わが闘病生活 ⑥

[56]

橘　義春

くろだ先生は私の不整脈に対する不安を取り除くために、実物大のプラスチックで出来た心臓の模型を持って来て、それを分解しながら心臓の仕組みを説明してくださったので、いくらか気持ちが楽になった。心電図で見ると、私の心臓は動きが極端に速くなったり遅くなったりするらしい。

私も、心臓病のひとつである不整脈について理解しなくてはと思い、本屋で『心臓病』の本と『不整脈』についての本を二冊購入して、読んでいるうちに頭が痛くなってきた。

心臓の主な病気は三〇種類以上あり、また、それに関連する病気も二〇種類以上もあるというのには驚かされた。不整脈で命を落とす人もあると、本には書かれている。まず心臓に負担のかかる登山を止めなくては、と決断は早かった。

毎月一回、くろだ医院で心電図による不整脈の検査をし、不整脈の治療薬ワソランをもらっていた。二月、三月、四月は薬が効いてか大きな変化はなし、私の日記で見ると五月、六月、七月と体調の悪い日が多くなり、治療薬ワソランをリスモダンに変更、八月に入ってからベルベンサーと併用して服用するようになった。

運動不足にならないように毎朝五時ころに起床し、近所を五〇分ぐらいウォーキングしている。人によっては、朝早く歩くのは健康に良くないという説を唱える人もいる。

古平町のように海からオゾンをたっぷり含んだ、清潔なおいしい空気をふんだんに吸い込めればよいが、東京は昼間は車の列で、排気ガスをわざわざ吸いに行くようなもので、これでは肺ガンになってケレと言っているようなあんばいだ。

八月六日（火）、私は小金井市の老人会の役員をしており、カラオケ大会の実行委員もやっておりましたが、その会議の席上で頭がなにかホワーとして、そのままテーブルの上にうつぶせになり失神してしまった。気がついたら周りが大騒ぎになっていた。どこも痛くなかったので、「貧血らしいので大丈夫です」と言って、そのまま会議を続けた。

解散してからバスに乗り、私の家の近くのＪＲの駅前でバスを降りて、駅の階段を昇り切ったとたんに首の右側の頸動脈のあたりが、フーと、誰かに息でも吹きかけられたような感じがした。とっさに、失神の前ぶれかも――と思い、三、四歩小走りして渡り廊下の窓枠にしがみついた。そこまでは覚えているが、その後はわからない。

⇦（次ページ上段へ続く）

渡御行列順序

警護	塩	警護
月旗	祓麻	日旗
神号旗	大榊	神号旗
供奉庄几	猿田彦	供奉
青旗	祭官	青旗
	獅子	
	太鼓	
赤旗	笛	赤旗

（前ページ下段から続く）

「どうしました？　大丈夫ですか」

「救急車だ！」

「駅員さんを呼べ！」

と、言ったような声がかすかに聞こえる。

「なんだろう？」

と、ぼんやりした頭で考えているうちに、どうやら意識が戻ってきたらしい。

パチリと目を開けたら私が仰向けになって寝ていて、十人くらいの若い人たちが、私の顔をのぞきこんでいたのにはびっくりした。ちょっときまりが悪かったが、

「貧血です。ありがとうございました。」

と、みなさんに何回も頭を下げて歩き出したら、一人の若い学生さんらしいひとが、

「階段は危ないので、下まで送りましょう」

と私に腕を貸して、階段下まで連れて来ていただいた。都会人の人情は紙のように薄いとか、若者は無関心だとかいわれているが、まだまだ東京の若者たちの人情はすたれていないとしみじみ痛感させられた。

駅の階段下でタクシーを待っていたが、空のタクシーが来なくて待ちくたびれてしまった。そろりそろりと、とうとう家までまで歩いて帰った。歩きながら、今日は一日に二回も失神して倒れたが、どうも単なる貧血なんかではなさそうだ。

――つづく――

琴平神社例大祭

昔の渡御行列順序を再現

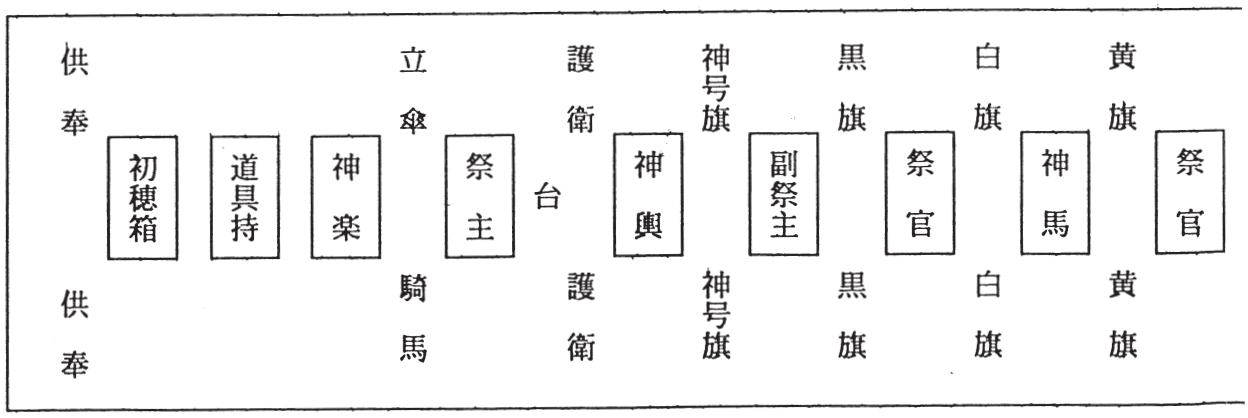
琴平神社は、慶応元年（一八六五）当時の箱館（函館）奉行所に願い出て、古平御用所から新地町の丸山下に社地を割譲され、京都からご神体を受けて創建されました。

慶応三年五月仮社殿を建築してご神体を祀り、明治四年七月に神殿と拝殿を造営しました。

ご祭神として大物主命（おおものぬしのみこと）・八重事代主命（やえことしろぬしのみこと）・保食神（うけもちのかみ）・崇徳天皇を祀っています。

明治五年、開拓使の「各郡に一宗社を創建して産神（うぶすなのかみ）＝その人が生まれた土地を守る神）とする」ということから、明治八年《郷社》という社格が与えられました。

下の図は長さ二メートルほどの巻紙に書かれていて、明治中ころのものかと思われますが、これだけで人数は八〇人以上とあります。



（沢江町・田口　甫さん提供）

柳川

石井愛子

壇上の女を見ればサッチーに見え　仏飯を上手に盛れた日の安堵

踊る人見る者沸かす良い笑顔　米の味死ぬまで飽きぬ老いの舌

老夫婦婆のむほんも円くすみ　畳叩く音も聞かれぬ文化国

渡辺ハツエ

町の灯がひとつ消えて

渡辺ハツエ

家具と寝具の専門店であった《いくい商店》さんが閉店なさってから、早や一か年余りが経ちました。

あの日、あの朝に何気なく手にしたチラシ広告の【閉店セール】を見て、一瞬、自分の目を疑いました。思えば四十年来、『越中屋さん』と言って慣れ親しんできたお店でした。本当に寂しい限りです。

私は、家の中をゆっくりと見回しました。家庭の必需品である家具類、子どもたちの勉強机や本棚には、子どもたちのいろいろな思いがこめられているでしょう。高価な、立派な家具ではありませんが、当時のわが家の経済状態を知っていた家具類は、私たち家族の生活を見守ってきてくれました。これらのすべての家具類は、いくい商店さんから買ったものでした。

当時は今のように車社会ではなかったので、ご主人がリヤカーで商品をわが家まで配達してくれましたが、ご苦労さまでした。

亡夫が健在だったころ、長女に〈姫鏡台〉を買ってやりました。父親が、娘への無言の愛情であったと私は思っています。その姫鏡台は、いま孫娘が愛用しています。祖父の愛情が孫娘にも伝わりました。

閉店セールの期間中、私は小用で浜町まで出かけ、帰りに店の前を通り掛かったときに、突然私の側へ寄って来た男の人がおりました。ご主人でした。ごていねいに閉店のごあいさつをされ恐縮しました。

町内からまたひとつ、昔からのお店が消えていくのは寂しい限りです。

えびすばあさん

竹内コト

昔は、町内になにか名物の人がいたようです。沢江村にも、《魚釣り》のとても上手なおばあさんがおりました。

毎日のように、朝早く起きて家の仕事を終えると、ふろしきに包んだ握り飯を腰にゆわえつけ、三角に折ったふろしきを深々とかぶって、岩の上で根気よく、午後まで魚釣りをしているのです。腰につけたふご（びく＝魚篭）にはアブラコ、ハゴトコなどが入っています。毎日のように浜に出ていて魚の居場所も分かるのか、大きなソイもよく釣るそうです。

岸のほうから、

「釣れますかァ――」

と、声をかけると

「今日はあんまり釣れねェね。潮あんべェでねェべが…」

と言いながらも、釣りをしているときのばあさんはいつも楽しそうでした。

このばあさん、いつも長い竹の釣りざおを担いで行くので、いつからか沢江の人たちからは『えびすばあさん』と呼ばれるようになりました。

今は家族での遊びとして、休みの日などは女の人でも魚釣りを楽しむ人も多いようですが、そのころは、魚釣りをする女の人などはいませんでした。男の人であっても魚釣りなどをしていると、「あの人はよほどの暇人（ひまじん）か、物好きな人」と言われる時代でしたから。

沢江の名物だったえびすばあさんは、とにかく自分の体を動かせるうちは、好きな魚釣りに精を出していたようです。

ふるさと歳時記

人の世の峠はるかに 亡き妻に捧げる〈5〉

土口 川 義雄

人の世の峠はるかに雲の行く

昭和三十五年、妻はまだ三十六歳の若さであった。

新しい職場の本社研修のため赴任する私を、病院のベットから涙の目で送り出してから容態が悪化して、私は途中から何度引き返そうと思ったか。そのつど、心を鬼にして激励電報を送り、ひたすら前に進んだ。

数カ月の研修を終え、札幌支社で働くようになってからも、妻の病状は一進一退で、以来、数年の間、医大・北大など四つの病院を転々として、妻のアパートに帰る日は少なかった。

珍しく小康が続き、医大から一応退院の形で妻はアパートに帰って来た。

一家がそろい、五人での生活を久方ぶりで楽しんだが、いったい何日続いたろうか。

夜すがらの吹き荒ぶ風雪となる

十一月に入り寒さも加わり、風が安普請のアパートを鳴らして夜すがら吹いた。

そんな夜中、妻は一階にしか無いトイレに何回も通っていた。余りの頻度(ひんど)に急に不安になった私は、大急ぎで段ボール箱にボロ布を重ねて詰め込み、部屋の隅で用を足すことを厳命した。感謝しながら、彼女はそれに何回もしゃがみ込んでいた。便意だけで、彼女の身体からはもう何も出なかった。

長く寒い夜が明け、外は白い世界に変わっていた。日曜日で欠ける家族はなく、妻の布団の横で賑やかな朝食が続いた。

一夜にして目がくぼみ、黄胆症状が顔に出てきた妻は、申し訳なさそうな顔に強いて笑顔をつくっていた。

妻の用事をさせるために次男を部屋におき、後の者は、下の流し場で食器洗いを始めた時、次男が階段を踏み鳴らして駆け下りてきた。

「父さんッ、母さんが何か言いたがってるよッ。」

しまったッ…。私は自分の優柔不断を悔いながら部屋に駆け上がった。本来なら昨夜か、今朝でも病院に手を打つべきだったのだ。日曜日だから…というのが心の奥にある、言い訳だった。

アパート中が騒然となり、近くの病院に走ろうとしている私を制して、住人の誰かが代わって走ってくれ、医者の来る間、皆で妻を励まし続けてくれた。

少しずつ冷えてゆく妻の手を握り締めながら「バカなッ、こんなバカなッ…」と、私は阿呆のように言葉を失っていた。

夕暮れ迫る頃、妻の遺骸がひっそりと部屋の片隅に置かれ、長男と私だけが、無言のまま線香の煙りを目で追っていた。

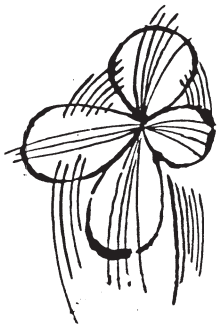
住民の誰かが、泣きじゃくる下の子二人を、包むようにして自分の部屋に連れて行き、今晩はウチに泊めますよ、と言ってくれていた。

妻の遺骨を抱き続け、私はひっそりと古平に帰った。私の強い希望で葬儀は一夜だけにしてもらい、私は幾重にも折り重なる悲しみの海と向かい合った。

肉親を失ったことの無い人など世界中探してもいないはずだが、悲しみがわが身を襲うと、人は孤独の苦しみに苛(さいな)まれてもがき、そこから抜け出すのは容易ではない。

踏み越えられぬ峠はあるまいと思うし、この世で受けた尊極の自分の命を、思いっきり大事にして進みたい。それが亡き妻への供養と思える。

═ 完 ═



俳句

古平ホトトギス会

独りとは気楽なものよ冷やっこ　斉藤波留
苺もぎハウスの中のアルバイト　山口悦子
初咲きの鉢チュウリップ見舞くれ　越野敏雄
看護終へ少し熱目の菖蒲湯に　大和田絵伊
笹の子の掘り散らかせし爪のあと　福井幸平
通し土間朝の番屋につばめ来る　仲谷美砂
裏山の亡夫恋う如き栗の花　関口勝志
夏蕨バスを待つ間も惜しみけり　よしざきり
戻り来て夏海いろの濃く匂ふ　山口浪
猫ねらうホッケに網を被せをき　仲谷比呂子
父の日や母に内緒のショッピング　仲谷安代
齢重ね小言の多き露に入る　室谷弘子
見頃なる牡丹の苑に自動車止め　大島喜恵
一湾のどっと濁れる雪解どき　越野清治

◆

根分けせしくじゃくしゃぼてん今咲くと今年も友の知らせくるる　丹後初江

短歌

古平岬短歌会六月詠草

早春のみどり萌え初む山肌にむらさき匂ふかたくりの花　竹内コト
ひと冬を病に臥せし友の歌嬉しくよみぬ春の窓辺に　池田テル
母の日に幾日か遅れ子の呉れし鉢のインパチェンス紅鮮やかに　奥山きよみ
風よけを立ててプリンスメロン植う末成りも香に立つ漬物にせむ　鈴木時子
抜きとりても絶えずに土を占めゆきし毒だみ今年も軒下に生ふ　堀典子
半世紀ぶりあひし友らとバイオリンのコンサートきけりこの感動よ　田中香苗
落ちていたボタン拾ひし吾を見て「ホッ若いね」と薬屋かへりぬ　長崎フユ
帰り際に見つけし蕗の一群は神の恵みとわれを忘れ採る　榊佳代
畑隅の落葉松にかけし鴉の巣卵抱くを朝夕見上ぐ　東美知
花咲きし数程梅は実結ぶとふ青き粒実の数多つきたり　山口スエ